

会長の挨拶（2）

「ロータリー思想の中にも、それ自体固有の難しさが存在している。大別すると4つの点となる。（本日は第1のみ報告します）

第1に、無限性乃至無窮性をあげなければならない。1905年にロータリークラブが創立されてから、その思想の殿堂は一瞬にして出来上がったものではなく、最初は物質的相互扶助から精神的相互扶助が生まれ、次いで、漠然たる対社会的目的を自覚し1908年になると、一般的奉仕概念が把握され、これについての理論的分析は1915年から23年頃まで多角的に続けられたのであったが、その後においてもロータリーの奉仕概念の追及は、なお連綿として続けられなければならない宿命にあり、依然として現在から未来永劫に渡っての発展の可能性をもっているのである。現在を一断面として切断して分析されたロータリー思想の理論的分析は、必然的に部分的かつ断片的にならざるを得ない。それは理論体系というには余りにも不完全なものたらざるを得ない。しかし、今日までに解明されてきた思想も必ずしも、軽視すべきものではなく、先輩ロータリアンの理論的努力を知るだけでも、相当膨大に渡る思想の内容を理解することが出来よう。

ロータリー思想の理論構造を説いた書物の数は意外と少ないし、ガイ・ガンディカー、ポール・ハリス、パーシー・ホジソン、直木太一郎及び小堀憲助のものを除いては体系的解説とは言えない。

ロータリーは地域社会に存在する職業管理組織を当該地域社会の精神的かつ物質的発展に必要不可欠の条件と考え、各組織の管理者の思考を相互に交換させ、その新たな思考が当該地域社会に何等かの形で還元されるという前提に立っているのであるから、ロータリーは、その管理社会の考え方の対立を比較・是認・否定・昇華させるところの総合哲学であり、従ってロータリーは具体的管理社会が存在し、そこに自由な思索が存在する以上、ロータリーは絶対に死滅しない。

ロータリーの道はあくまで最果の地のない道程なのである。各ロータリアンの無限のロータリーに対する謙虚な追及がこの世を去る日に至るまで続けられなければならない要素を見出すことが出来るのである。特定時・特定場所におけるロータリアンの思索が必然的に限時的なもの、あくまでも不完全なものたらざるを得ないことも意味する。」（小堀憲助著 ロータリー思想の理論構造より）

続きは次回です。